

# 特別講演



# 戦略と決戦

ローレンス・フリードマン

## I

「戦略 (strategy)」という言葉は、ギリシャ語で「将軍の職務」を意味する *strategos* が語源である。その基本的な諸概念は「戦争の技法」という表題の下に何世紀もかけて練り上げられ、やがて 18 世紀のフランスで、「戦術以上のもので、謀略ほど卑劣ではないもの」を意味する言葉として初めて辞書に登場した<sup>1</sup>。ナポレオン時代には、皇帝が天賦の才を備えるだけでなく賢明な将軍として従うべき体系的原則を体現する存在であったことを背景に、この「戦略」という言葉が広く使われるようになった。トルストイの小説『戦争と平和』の中で、疑り深いボルコンスキー老公爵は息子のアンドレイにこう尋ねる。「教えてくれ。戦略とかいう新しい方法でナポレオンを倒すというが、ドイツ軍でどんな訓練を受けたのだ」。戦略とは最初から、正しい策があれば困難な目標でも必ず達成できるという確信を与えてくれるものだった。現在でもこの言葉はそのような含意で用いられている。

戦略と呼ばれるようになった特殊な分野の発達は、欧米諸国の陸海軍が着実に専門職化してきたことと、大規模な艦隊や地上部隊を動かしたり、砲撃や包囲戦など、各分野の技術的な要求を把握したりする際に求められる課題が次第に複雑になってきたことの結果である。

とはいえ、最近の事例を見ても、戦略とは極めて難しいものであることは明らかである。ここでは、戦争行為に関するいくつかの定着した概念の起源と、その限界について考えてみたい。ここである概念的枠組みが一貫している点が興味深い。この枠組みは戦略研究分野の古典的思想に明白に由来することから、「古典的モデル」と呼ぶこととする。当世の影響力ある戦略理論研究者でも、エドワード・ルトワック<sup>2</sup>やコリン・グレイ<sup>3</sup>などが明らかにこの古典的な系譜に連なっているほか、ジョン・キーガン<sup>4</sup>やマーチン・ファン・クレフェ

---

<sup>1</sup> 戦略の起源については、Lawrence Freedman, *Strategy: A History* (New York: OUP, 2013) を参照。本稿には同書の内容を一部引用した。

<sup>2</sup> Edward, Luttwak, *Strategy: The Logic of War and Peace* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1987).

<sup>3</sup> Colin Gray, *Modern Strategy* (New York: OUP, 1999).

<sup>4</sup> John Keegan, *A History of warfare* (New York: Random House, 1993).

ルト<sup>5</sup>は、それがもはや通用しない理由を論証するためにも、このモデルを取り上げる必要があると考えている。

この点は、戦略研究分野の顕著な特徴である。現代のビジネス戦略家が、新製品のマーケティングや株式公開買い付けを行う際に、19世紀初頭の文献が最良のテキストであると主張することなど考えられない。政治戦略家がそうした古い時代から選挙活動のヒントを得ることはあっても、それは歴史的興味以上のものではないだろう。しかし軍事戦略家の場合、ごく少数の自尊心の強い者を除いて、クラウゼヴィッツを無視していいと考える者はいない。孫子まで遡ろうとする者も少なくないはずである<sup>6</sup>。果敢に時代の先を行こうとする者なら、20世紀半ばのベジル・リデル＝ハートの思想を取り入れるかもしれない。軍事戦略の研究者は、着想、指針、検証の源を古典に求めようとするのである。

これには納得できる理由がある。軍事戦略は現在もなお大規模戦争が中心であり、そのような戦争はまれにしか起こらない。最も重要なのは「古典」に影響を与えたナポレオン戦争と、100年前に始まった第一次世界大戦、そして69年前に終焉した第二次世界大戦である。核兵器の出現により真に革新的な考え方が生まれてきたとはいえ、これは戦争をするというより、戦争を抑止することに関する理論である。他の下位分野として、ここ10年で再び活発化しているゲリラ戦争と対反乱活動があるが、これらは概して中核的問題の派生物とみなされてきた。

1970年代に古典的な軍事戦略が再確認されたことには、公式見解に抑止思考が広まったこととベトナム戦争での悲惨な経験に対する反応としての側面がある。この再確認は主要な側面における「軍事改革」の観点から説明されたが、実は反動的なものだった。軍事的慣行の理念型はかなり古い時代に見出だされたものであり、またその背景となる戦争の理念型では、正規軍同士が整然と交戦し、有能な指揮官が高く評価され、非戦闘員は巻き込まれることなく、戦闘の結果によって国の命運が決まると想定された。改革論者からは、変則的な形態の戦争に何十年もとらわれ続けたために、古典的な形態が軽視されるようになったという批判の声が上がった。

もう一つの批判は、通常戦力の責任者の仕事が大規模な調達計画や極めて官僚的なペンタゴン（米国防総省）の事情と切り離せなくなったという点である。将軍の統率力は経営に、戦略はシステム分析に取って代わられた。戦争は上級司令部の職人的手腕を発揮する機会ではなく、軍事力を通貨、死者数を生産量とする壮大な財務計画とみなされるようになったというのである。

<sup>5</sup> Martin van Creveld, *The Transformation of War* (New York: Free Press, 1991).

<sup>6</sup> 現代に続く孫子の兵法書の影響力は、ウェブサイト <http://www.sonshi.com/> に見られる。

米軍がベトナム戦争後の再建を模索するなかで、この批判に共感する動きが現れた。古典的なアプローチが見直され、機動戦を重視して消耗戦を避ける考え方が強まり、これが野戦教範や「エアランド・バトル」などのドクトリンの展開にも取り入れられた。このアプローチには、以下のように多くの歴代の偉人の影響を見出すことができる。

- ジョミニ（およびクラウゼヴィッツ）：一つの戦闘が決定的になりうるという確信
- 大モルトケ：戦争の作戦行動は政治的干渉を受けるべきではないという信念
- 孫子とリデル＝ハート：消耗戦より機動戦を好む傾向
- クラウゼヴィッツ：「重心」としての軍事目標の設定

この古典的モデルへの回帰の背景にあったのは、冷戦と依然として存在する第三次世界大戦の可能性である。念頭にある敵はワルシャワ条約諸国であり、その強固な軍隊と軍事方針はやはり19世紀の思想に遡ることができる。作戦技術と機動戦を重視するソビエト連邦の姿勢は、西側のアプローチを固めさせることになった。両者の大規模軍が相まみえるとなれば、少なくとも核の問題が持ち上がるまでは、互いに引けをとらない戦力をもって戦える準備をしているはずだと考えたのである。

冷戦が終結した時点で、大規模戦争が二度と起こりそうにないのであれば、これらの概念にはもう妥当性がないのではないかと疑うのに十分な理由があった。一つには、対反乱活動の諸問題が、さらに複雑な形で再び表面化した。核抑止に関する問題も依然として残り、ますます複雑化している。加えて、こうした確立された概念にすんなりとは当てはまらない特異なやり方で、威圧目的や新たな既成事実を作る目的で武力行使が行われる事例が次々と生じている。たとえば「サイバー戦争」など、新たな形態の紛争に積極的に取り組む動きがある。このような現状を見れば、古典的モデルに関する問題はもう時代遅れなのだと言いたくもなるだろう。これはたとえば、我々は「第4世代の戦争」に突入したというような主張の根底にある想定である<sup>7</sup>。

しかし、私は古典など無視していい、あるいは、戦争の形が変わったために古典的な考え方には妥当性がなくなった、とは考えていない。地政学的な変化が遂行されうる戦争の形に影響し、兵器の変化が戦争に付随するリスクに影響するのは確かだが、歴史の不連続性を主張するにあたっては慎重を期さねばならない。「第4世代」に関連する活動は何世紀も前に遡ることができる一方、大規模戦争の可能性は現在もなお軍備拡充を駆り立てて

<sup>7</sup> Antulio J. Echevarria II, *Fourth-Generation War And Other Myths* (Strategic Studies Institute, U.S. Army War College: November 2005).

いる。大規模戦争の引き金になりかねない偶発事件の例も、決して少なくはない。中国とロシアという二大国は周辺諸国との国境をあちこちで引き直そうとし、主張を通そうと行動を起こしている。ロシアとウクライナは、これまでのところは自制気味で、白黒定まらない混然とした状況ではあるものの、去る 2 月末から事実上の戦争状態にある。いずれにせよ、古典的モデルの支持者であれば、それが大規模戦争にしか適合しないものだと認めないだろう。このモデルは、武力行使を伴うあらゆる紛争行為への期待を生み出してきたのである。

私が主張したいのは、古典から導き出されたモデルには初めからある欠陥があり、その欠陥が常に問題を生じさせてきたということである。その欠陥とは、軍事と政治との間で戦略が分離されていることである。このモデルの前提では、政治は戦争開始時の目標設定と終結時の和平交渉の際には関係してくるが、その間の交戦期においては軍事的見解が優先されなければならない。政治と軍事の一体化が普通だった古代には、両者の分離は存在しなかった。ナポレオンも、自身は政治面より軍事的戦略にはるかに長けていたとはいえ、やはり両者を一体として捉えていた。

その後、この両者が分離したことは理解できる。必要とされる能力が全く異なるのである。政治と軍事の統合は、必ず政軍関係における課題になる。民主社会では軍事は常に政治に従属しなければならないという主張は妥当だが、難しい政治的判断の前に軍事的助言を受けるべきなのはどの時点か、あるいは政治家に作戦上の問題を知らせていいのはどのような場合かを話し合うのは、容易ではないのが常である。自らを将軍であると勘違いした政治家も、自らを政治家であると勘違いした軍人も、皆同様に破滅的な結果を招いてきた。

西洋では伝統的に、政治と軍事の整合はトップダウンの問題であり、最上層に限られた政軍関係問題とみなされている。「戦争は他の手段をもってする政治の延長である」とするクラウゼヴィッツの金言は、まさにこの点を提起している。問題は、政治家がひとたび戦争目的について指示を下せば、軍部は実際の戦争遂行について完全な権限を委譲され、戦争中の政治からの介入は最小限におさえられるべきだとする古典的モデルの前提となる考え方にある。その根拠の一つは、戦闘で敵軍に全面的に勝利することが政治的目標達成の最善の手段だという仮定である。勝利すれば、敵は降伏するしか選択の余地がない。軍事的勝利が成されれば、政治的勝利は自然とついてくるというわけである。

したがってこのモデルの核心にあったのは、明白な戦果を生み、その後の政治的解決を決定づける遭遇戦としての「決戦」の概念である。これに関する最も明快な考察を行ったのは、19 世紀の最も影響力のある教本を著したスイスのジョミニ男爵である<sup>8</sup>。現在ではク

<sup>8</sup> Antoine Henri de Jomini, *The Art of War* (London: Greenhill Books: 1992).

ラウゼヴィッツの方がよく知られているが、当時はジョミニの方がはるかに影響力は大きく、特に米国の軍事思想に多大な影響をもたらした。ジョミニの熱心な信奉者であったウエストポイント米陸軍士官学校のデニス・マハン教授が、南北戦争の将軍に与えた影響は知られている。その息子のアルフレッド・セイヤー・マハンは、このジョミニの影響を海軍力の考察にまで広げた<sup>9</sup>。その思想はさらに、イタリアのドゥーエによる空軍力の考察に影響を与えた<sup>10</sup>。

過去2世紀にわたる戦争史を振り返ると、大規模戦争に限らず、古典的モデルに厳格に従ってきたとは言えないのは明らかで、中には全く従っていない例もある。その理由の一つは、古典的モデルは戦争の理論であると同時に戦闘の理論でもあるからだ。その核心には、戦闘における軍事的勝利が戦争における政治的勝利に結びつくという、戦争の決定的行為としての戦闘の概念がある。二つの軍隊が直接的に交戦する戦闘では、作戦上の検討事項が何より優先される。しかし、戦争にはそれよりはるかに多くの事柄がからむ。目標設定と終結交渉だけではなく、国民士気の維持、政治的結束の維持、戦時官僚制の監督、さらに同盟の締結や基地探しなどである。本稿では、決戦の概念およびその発展の経緯と制約を焦点としたい。この概念が重要であり続けるかどうかは、今後の紛争がどの程度戦闘を伴うか、あるいは武力行使のあり方が変わっていくかどうかにかかってくるだろう。

## II

見方によっては、紛争解決の決定的手段として戦闘を選ぶ欧米の志向は、古典時代にまで遡ることができる。中世ヨーロッパでは戦闘は紛争解決の一形態として認められており、それは神の介入への期待という趣を添えた、一種の賭けとしての形態だった。最終的に戦場を支配下に置いた側に、自らが示す条件での政治的決着を要求する権利があった。

その基礎となる論理はナポレオンによって極限まで押し進められ、やがてそれを解釈したクラウゼヴィッツとジョミニの手によって戦争論に発展する<sup>11</sup>。その出発点は、軍事的手段と政治的目的の関係についての単純な前提だった。19世紀の間にこの前提はさらに単純化し、戦闘に勝利した時点で敵軍はこちらの意のままになるのだから、政治的勝利も確実に

<sup>9</sup> マハンについては Jon Tetsuro Sumida, *Inventing Grand Strategy and Teaching Command: The Classic Works of Alfred Thayer Mahan Reconsidered* (Washington DC: Woodrow Wilson Center Press with Johns Hopkins University Press, 1999) を参照。

<sup>10</sup> Giulio Douhet, Translated By Dino Ferrari, *The Command of The Air* (New York: Coward-McKann, 1942) を参照。

<sup>11</sup> Carl Von Clausewitz, *On War*, edited and translated by Michael Howard and Peter Paret (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1976).

ついてくると考えられるようになった。

クラウゼヴィッツは制限戦争の可能性についても認識していた。前世紀に一般的だった制限戦争は、敵を完全に支配下に置くのではなく、交渉によって戦争を終結させるものである。クラウゼヴィッツがもっと長生きしていれば、こうした可能性を深く考察したかもしれないが、結局そうはならなかった。したがって彼の主な論点は、敵軍の戦闘力を排除することによって敵国を無力化するための戦闘の用い方にとどまっている。

この考え方は「殲滅（せんめつ）戦略」と呼ばれるようになった。ドイツの軍事史家ハンス・デルブリュックがこの戦略と「消耗戦略」とを対比したことで、特別な位置づけを与えられた用語である<sup>12</sup>。デルブリュックは消耗戦を、軍が全滅していなくても戦闘を放棄するように敵を追い込むこととみなした。消耗とは、敵がそれ以上戦争に立ち向かえないところまで疲弊させられたことを意味する。この状況は、国の存続が危ういわけではなく、さらにリスクの範囲が限定的で妥協の余地がある場合に生じやすい。ここで、手法についての混乱が生まれる。決定的でない戦闘でも、それが連続すれば消耗が生じない理由はないからである。

ドイツの参謀本部は、殲滅戦に代わる賢明な選択肢などありえないとはねつけた。これは、第一次世界大戦前夜の欧州各国の軍隊に共通するテーマだった。しかし、殲滅戦と消耗戦のどちらを選ぶかは戦略上の選択の一つになりうるだけでなく、物質的な状況も反映することになる。戦闘が避けられないならば、勝てるだけの十分な戦力があるのに加え、決戦の後に敵の領土に侵攻し占領できるだけの能力が残っていなければならない。最終的な軍事的優位性への確信がなければ、殲滅戦を強行するのは賢明ではない。長期戦に備えた戦力温存が必要なら、間違いなく有利な状況以外での本格的な作戦計画に基づく戦闘は避けるのが最善だ。敵が一つの部隊を失ってもすぐに別の部隊を配備できるようなら、味方は意気消沈してしまう。この理由から、直接的戦闘を避ける一手段として、消耗戦と機動戦の連動が生まれてきた。デルブリュックは、このアプローチは戦闘と機動戦の混合になりうるとし、戦場での決定的勝利は達成不可能だといずれかの側が悟るまでは、別の選択肢であると同時に補完的なものになりうるとして評価した。

したがって、決戦の概念に対する批判の根拠としては、常に二つの異なる問いの潮流があった。

一つは、戦場において直接攻撃以外の手段で敵を打倒することは可能かという問いで、

<sup>12</sup> Hans Delbrück, *History of the Art of War within the Framework of Political History*, trans. Walter J. Renfroe Jr., 4 vols. (Westport, CT: Greenwood Press: 1975-1985).

Gordon Craig, "Delbrück: The Military Historian," in Peter Paret, ed., *Makers of Modern Strategy* (Princeton: Princeton University Press, 1986).

もう一つは、いかにして軍事力を実質的な政治的勝利に転化できるか、という問いである。

クラウゼヴィッツが殲滅戦略とは異なる方策への関心を最後まで追求していれば、この二つの問いに対してさらに深い考察が求められただろう。クラウゼヴィッツにそのような関心があったことは、彼の(概して曖昧な)「重心」の概念に見て取れる。すなわち、最大の軍事的効果は敵の力の源を攻撃することによって達成できるとする考え方である。それは一般には敵の軍隊と考えられるが、「国民の意志」や同盟の結束という無形の要素を弱めることが最も致命的な打撃となる場合もあるとされる。

### III

ここで、現代軍事史において普通は重要とはみなされないある事例について考えてみたい。それは普仏戦争での出来事だった。この戦争はさまざまな理由で重要である。たとえば、プロイセンの主導のもとにドイツの統合を促したことや、予備軍の動員と兵站上の可能性の開拓における綿密な組織的作業の重要性を実証したことがあげられる。戦闘技術についてはドイツ軍の方が敵軍より熟達していた。しかし、ドイツ軍はセダンの戦いでフランス軍に圧勝しながら、終戦に持ち込むことができずに苛立っていた。交渉相手になるはずだったフランスの政府が打倒され、新たに樹立された共和政政府は戦争続行を言明した。これによりドイツ側はジレンマに陥る。ドイツは当初からフランス全土を占領するつもりはなく、それができるだけの戦力も持ち合わせていなかった。パリを包囲することはできたものの、当時国際社会はフランス側に同情的になりつつあったうえ、パリの抵抗が長引くにつれ攻囲部隊の維持費用がかさみ、他の大国がフランスに援軍を送り込むリスクも大きくなっていった。こうした状況から、市内を砲撃して抵抗を断念させたいビスマルクと、市街砲撃は戦争規準の違反と考える軍部との間で激しい議論が起こった。結局は皇帝がビスマルクの支持に回り、パリは砲撃を受け、降伏にいたった。やがてパリはコミューンのもとで再び蜂起するが、厳しい講和条件を履行するために新たなフランス政府によって鎮圧されることになる。

ドイツの勝利への道筋を作ったヘルムート・フォン・モルトケ陸軍元帥は、講和後のパリ・コミューンの蜂起までを含む一連の出来事から二つの教訓を導き出した。第一は、新たに出てきた社会的および政治的勢力が国政の秩序を長期にわたって混乱させる可能性が出てきたという点である。老境に達しつつあったモルトケは欧州全土での社会主義運動の台頭を目にし、欧州で再び大規模戦争が起きれば壊滅的な事態になると確信するようになった。そのような戦争はおそらく国民の戦争となってそうした勢力を暴走させ、欧州の秩序を崩壊させると考えたからである。モルトケの後を継いだドイツの参謀本部は、彼らの任

務そのものが否定されかねないこの考えに恐れをなし、耳を貸そうとしなかった。

しかしながら、モルトケの第二の教訓については参謀本部も肝に銘じた。ビスマルクの見解は、「戦争により達成されるべき目標の決定と絞り込み」方法についての助言は戦前から戦中の「政治的機能」であり、したがって文民（政治）側が「戦争の遂行に及ぼす影響」につながるというものだった。一方、モルトケは、戦略は「政策から完全に独立」していなければならないと考えていた。戦争の作戦レベルに関しては、指揮官はいかなる政治的干渉も存在しないと想定しなければならないとしたのである<sup>13</sup>。

モルトケの後継者にとって、これは基本原則となった。1914年7月の危機の際、ドイツ皇帝は一時、攻撃部隊がベルギーを通過するという案は賢明といえるかとの疑問を呈したが、それは不可欠だと進言されると、この問題をそれ以上追及しなかった。ロシアのニコライ皇帝と軍幹部らとの間でも、ロシア軍動員に関して同様のやりとりがあった。戦争の「作戦レベル」を政治からほぼ無縁の領域とする考え方は、ドイツ軍において決して放棄されることはなかった。やがてソビエト軍もこの概念を受け入れ、米軍においても、とりわけ政治的マイクロマネジメントが問題になったベトナム戦争の後、信条の一つとなった。

## IV

この「作戦レベル」の概念に対する信念を持続させるには、決戦の持つ力の不変性を確信できることが必要だった。第一次世界大戦の経験は、この信念を揺るがしてもおかしくなかった。火力の残虐性が高まるとともにその攻撃範囲が広がり、戦場に動員できる兵士の数も増えたことから、戦闘に勝利することははるかに難しくなっていた。1914年以前は、決定的な優位性を得られるかどうかは、敵の火力に対抗し、敵の防衛線前の「キリングゾーン（殲滅地域）」を突破する手段としての動機づけまたは機動作戦、あるいはその二つの組み合わせによって決まると想定されていた。士気の高い兵士たちは果敢に危険に立ち向かうが、士気の下がった部隊は崩壊する。敵の弱点を突く巧妙な奇襲作戦は、物理的優位性を帳消しにできる。奇襲自体に心理的効果があり、強靱なはずの兵士たちを惑わし混乱させる。他方、強力な部隊が奇襲や欺騙行動を警戒していれば、万一の場合でも劣勢な敵軍を壊滅させられる見込みがある。

1914年に第一次世界大戦が幕を開け、こうした理論がことごとく試され始めたとき、その後の戦闘の規模と強度や膠着状態の持続期間は、クラウゼヴィッツの予測をはるかに超えた。しかし、数々の問題にもかかわらず、軍人たちが奉じる決戦の概念はいささかも

<sup>13</sup> *Strategy: A History*, pp. 102-7 を参照。

揺るがなかった。それはおそらく、結局のところ第一次大戦が一つの決戦により休戦を迎え、その後ドイツが連合軍側の講和条件を受け入れたことによって終結したためだろう。

それ以後は、より効果的で流血の少ない戦闘から決着にいたる方法を見出すことが目標となった。戦車や航空機を戦術に活用できる時代になっても、正しい戦術によって先々の長期にわたる膠着状態を回避できるという考え方に変わりはなかった。リデル＝ハートは機械化師団の潜在力を考察し、西部戦線の際立った特徴であった直接的な正面攻撃とは全く対照的な、間接的な作戦行動の概念を提示した。大戦中には膨大な人的・物的資源が費やされたことから、戦争の最も有力な戦略が、それまでは「exhaustion」と同義で用いられていた「attrition」という言葉（共に「消耗」の意）に関連づけられるようになり、用語上の混乱が増した。リデル＝ハートはまた、戦争の目的を限定できればその手段も限定されるとの立場から、限定的な目標設定を強く主張した。さらに、戦場で大勝するよりも、主として意表をつく作戦によって混乱状態に陥れることで敵を撃破できる可能性があることを強調した<sup>14</sup>。

大量殺戮をせずに通常戦争に勝利する方法を案出しようとしたリデル＝ハートの試みは、和平成立後に正常な政治的関係を回復させることができるように、目的を係争中の問題に明確に限定すること、そして奇襲や妨害作戦を利用し、可能な限り戦闘を避けることによって不必要な死や破壊を減らす戦争形態をとることを主張するものだった。

第二次世界大戦では目標が限定されず、大規模戦闘や悲惨な残虐行為、ゲリラ活動によっても決戦の概念に対する信奉を終わらせることはできなかった。正式な終戦は、やはり敗軍の降伏によってもたらされた。決戦の概念が持続していたことは、ベトナム戦争への米国の対応にも見て取れる。ゲリラ戦が続き、間欠的に戦闘が起こる状態が何年も続いたにもかかわらず、北ベトナムが士気を失った南の侵略に成功し、元々の軍事境界線で戦争が終結した。これが米軍を現実否認に走らせた。正規戦として戦えていればベトナム戦争の結果は違ったはずであると主張したのに加え、最も顕著な反応として、欧州中心部における大国間の正規戦に備えるという慣れ親しんだ態勢に速やかに回帰したのである。

米軍がベトナム戦争の後遺症を克服し、徴兵制廃止の影響を受け入れつつあった1970年代には、米軍の再建には北大西洋条約機構（NATO）の最前線を守るという優先課題に注力するのが最善だという強い信念があった。加えて、米国政府は60年代以来、途方もない核の脅威がますます高まるのを恐れ、核抑止への依存軽減の意向を示していた。この点については、ベトナム戦争の後半や1973年の第四次中東戦争で示されたように、新しい技術により特定の標的を極めて高い精度で攻撃できるようになったことで、通常戦

<sup>14</sup> Sir Basil Liddell Hart, *Strategy: The Indirect Approach* (London: Faber, 1954).

争に関するドクトリンを再考する機会が生まれつつあった。同時に、欧州の安全保障問題が以前より大きくなったとの懸念もあった。ワルシャワ条約機構は依然としてかなりの数的優位にあるうえ、米軍がベトナムで手一杯になっている間にドクトリンを刷新し、兵力を増強したと考えられていたのである。

ベトナム戦争後に、複雑な政治情勢の中での軍隊の役割を検討する機会は確かにあったかもしれない。ベトナム問題を古典的な通常戦争の観点から捉え直すのではなく、新しい技術とソビエトの軍事力増強に照らして見ると、軍事戦略の問題は政治とは全く無関係に、あくまで作戦上の選択の一つとして、とりわけ機動戦論か消耗戦論かといういくぶん作為的な選択として提示されるようになった。この二分法の発展に最も影響力を及ぼした人物は、元戦闘機パイロットのジョン・ボイドである。ボイドはリデル＝ハートに倣い、重要な戦略的課題は敵の意識に不安と混乱を生じさせることだと考えた。これは、偽装作戦あるいは通信手段への攻撃という手段で、敵の戦う意志を弱め、また現実認識を歪めさせることによって達成できるという。その最たる例としてボイドは 1940 年のナチス・ドイツのフランス侵攻をあげ、「電撃戦対マジノ線メンタリティ」という表現でこの二分法を提示した。消耗戦は物理的領域に重点を置き、破壊力として火力を用いるのに対し、機動戦（電撃戦）は精神的領域に対して物理的な力を用い、曖昧さや流動性、欺騙を利用して「驚愕と衝撃」をもたらすことが目的だとする<sup>15</sup>。

この誤った二分法は米国の戦略議論に少なからぬ影響を及ぼし、「消耗戦」に代わって「機動戦」が強く推されるようになった。こうした議論はすべて冷戦の文脈内で起きた。すなわち、敵は明白かつ強大であり、かつ重要なのは抑止と、必要であれば東西ドイツ国境を超えての侵略を食い止めること、という文脈である。したがって、その焦点は、大規模軍隊が欧州の中心部でぶつかり合う古典的な大国同士の対決に置かれていた。これならば、軍事戦略に関する古典的文献をもとに、情報化時代に合わせた最新の戦略に書き換えることが可能だったのである。また、「作戦レベル」に注目することも奨励された。これは指揮官の手腕が発揮されるべき次元である。一時は、この作戦レベルはこれまで軽視され、それとともに欧州での戦争の古典的伝統も軽視されてきたといわれていた。作戦レベル重視の主唱者であるエドワード・ルトワックは、当時の米国の軍事思想にその点が欠けていることを嘆いた。「電撃戦や縦深防御などの戦略が進化し、活用される」のはこの「作戦レベル」であり、米軍では「消耗戦型の戦争」に依存してきたためにそこが軽視されていたという。消耗戦は苦境に際してのやむを得ない対応ではなく、ある特定の思考様式を反映

<sup>15</sup> ボイドの理論の概要については Frans P. B. Osinga, *Science, Strategy and War: The Strategic Theory of John Boyd* (London: Routledge, 2007). を参照。

した意図的な選択だというのである<sup>16</sup>。

軍事史をひもとくと、消耗戦と機動戦が二者択一の問題だという見方を裏づける要素はほとんど見当たらない。二度の世界大戦で、ドイツは機動戦に勝って結果を出そうと試みた末に、結局消耗戦を戦うことになった。1980年代初めのNATO最前線に関して言えば、機動戦の持つ可能性が過大評価された。意表をつく素早い行動と聞けば興味をそそられるが、漠然としたものでもあり、大規模で機動性に欠ける近代軍で実践できるとは想像しがたい。こうした過大評価は、根本的に現実離れした懐古的戦略観の表れであり、通常政治・経済上の制約を無視し、ソビエトの軍事方針と、想定される機動戦への脆弱性に過剰に影響され、さらに西側の機動戦実施能力を過度に楽観視した見方である。提案された機動戦略は非現実的なものが多かった。都市のスプロール化が進み、道路網や鉄道網が複雑に入り組んだ欧州の状況においてはリスクの高い選択肢となるうえ、優れた諜報能力と効果的な指揮統制が過大に要求される戦略だったのである。欠陥のある機動戦では完全な大失敗を招き、後衛が危険に晒されることになりかねない。

## V

機動戦の重視は、決定的な一撃による勝利への切望の表れだった。しかし、そこには三つの問題があった。

第一に、その一撃を見舞うための計画がどれほど優れていても、実行したときに失敗する可能性はある。モルトケの有名な言葉のとおり、敵に遭ったら計画通りにはいかなくなるのである。机上では大胆で素晴らしいと思える作戦でも、いざ実行してみると頼りなく精彩を欠いたものになることもある。

第二に、強烈な一撃を見舞ったとしても、敵がただ浮き足立つだけでなく、完全に無力化されなければ意味がない。まだ戦えるだけの兵力が逃げおおせたり、敵が十分な予備兵力を備えていたりすれば、戦闘は続く可能性がある。軍事行動の初期に軍事的成功を収めても、早期の降伏がなければだらだと長期化しかねない。敵の正規軍を打ち破っても、非正規勢力の抵抗はその後も続くかもしれない。ナポレオン軍がスペイン戦役で、頑なで非協力的な民衆に加えてゲリラ兵の抵抗に遭ったときがまさにそうだった。講和条件を守らせるため敗戦国の占領が必要なことがあるが、これには戦争に勝つまでと同等の時間と労力が費やされる場合もある。そうかといって、占領を回避すれば政治的解決の実現がさ

<sup>16</sup> Edward N. Luttwak, "The Operational Level of War," *International Security*, Vol. 5, No. 3, 1980-81, pp. 61-79.

らに難しくなりかねない。

第三に、実際に勝利への鍵となるのは、軍事計画の質や戦闘における成果よりも、苦難や犠牲が増大するなかで国民の士気を維持することや、安全保障面で利害が共通する国々との同盟関係の構築と維持による勢力均衡の再編、あるいは敵の同盟関係の分断といった極めて政治的な作業である場合が少なくない。

したがって、敵が予想外に強靱で、戦闘が決定打にはならないこともある。同盟の均衡が軍事力の均衡と同等の重要性を持つ場合や、紛争が混乱を残す不本意な形で終わる場合もある。敵をこちらの意図に逆らえないところまで鎮圧するのは極めて困難な仕事で、実現できることは滅多にない。また、政治的目標を限定することで、こうした落とし穴や軍隊への負担を軽減できるわけでもない。敵を打倒するのに必要な兵力は敵の能力と取り組みによって決まるのであって、かかっている国益によるのではない。戦闘で敵に勝つことを任務と定めれば、比較的些細な紛争でも大掛かりな戦闘を伴いかねないのである。

欧米の、中でも米国の軍隊が戦闘能力の面で非常に優れていることは知られている。この点は二度のイラク戦争とアフガニスタン戦争でも証明された。1991年の戦闘はクウェートの解放という求められる政治的成果につながったが、紛争を完全に収めることはできず、結局次の戦争につながった。そこでも戦場で圧倒的に勝利したものの、その後生じた社会と政治の動乱は現在に至るまで10年以上続き、収まるどころか近年さらに悪化している。

## VI

現在は、古典的モデルが復活した冷戦時代の二極構造とは全く異なる情勢にある。冷戦当時は政治情勢が十分に認知され、それが大きく変わることは考えられなかった。しかし、現在の国際情勢は動的かつ不確定で、台頭する国もあれば衰退する国もあり、さまざまな経済システムや政治形態が競合し、相互依存関係が複雑に入り組んでいるうえ、常にメディアに監視され、ソーシャルネットワーキングも盛んに行われている。一時は悪党扱いされていた国や党派が急に有力な同盟相手として浮上したり、その逆の現象が起こったりする。

こうしたことのすべてが、長期的な目標の設定を（ごく一般的なものを除いて）さらに難しくしている。古典的モデルは常に問題を孕んでいた。戦略の政治面と軍事面に絶えず同時に対処することが不可欠な世界では、その問題がさらに増大する。これを怠ると、軍事的なレトリックにおいて、軍事的手段では解決できない問題の決定的解決を約束したくなる誘惑が、そして政治的レトリックにおいて、主要な価値観や原則に適合するものの、使えるリソースや既知の実施手段ではとても達成できない目標を設定したくなる誘惑が生じ

るのが常なのである。

紛争はいくつもの段階を経て展開する。最初の行動が決定的となることはまれで、その後の行動は、意図しない結果や他者からの予想外の反応も含め、それまでの行動が状況に及ぼした影響によって変わってくる。このため武力紛争は、勝者と敗者がはっきりしないまま燃りつづけたり、後の紛争の火種を残す不本意な妥協で終わったりする場合も少なくない。むろん、交戦後に明確な勝敗がつく事例が全くないわけではない。勝敗がつくのは原則ではなく、例外だということである。したがってここでの課題は、戦略の政治面と軍事面の相互作用をはじめからもっと慎重に考慮することと、紛争が段階を経て進むなかで、指導者が適応力と柔軟性を発揮しなければならないという点を認識することである。

